

# アクティブラーニング支援をするためのライブラリアン 育成ワークショップの試行

Trial Workshop for Active Learning Support in Librarian Training Course

兵藤健志<sup>1</sup> 天野絵里子<sup>2</sup> 森玲奈<sup>3</sup> 山田政寛<sup>4</sup>  
Kenshi Hyodo<sup>1</sup> Eriko Amano<sup>2</sup> Reina Mori<sup>3</sup> Masanori Yamada<sup>4</sup>

九州大学情報システム部<sup>1</sup> 九州大学附属図書館<sup>2</sup>  
東京大学大学院情報学環<sup>3</sup> 九州大学基幹教育院<sup>4</sup>

Information System Department, Kyushu University<sup>1</sup>  
Kyushu University Library<sup>2</sup>  
Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo<sup>3</sup>  
Faculty of Arts and Science, Kyushu University<sup>4</sup>

〈あらまし〉 近年、問題解決型学習などのアクティブラーニングの推進が全国的に高等教育で行われている中で、大学図書館は学術コンテンツの整備・提供という従来の役割に加えて、授業外学習の場として充実化させることが進められてきている。しかしながら、新たな「学びの場」として大学図書館が転換をはかるには、大学図書館員の教育・学習支援に関する意識、さらには学習観の変化も必要となる。本稿では、九州大学を対象に大学図書館員のアクティブラーニングに関する教育・学習支援に関する意識を喚起し、自らそれらに関する企画を立てることができるようにすることを目的としたワークショップの実施、その成果について報告する。

〈キーワード〉 大学図書館 Staff Development (SD) アクティブラーニング 学習支援

## 1. 学習の場としての図書館

近年、高等教育の質的変換が求められる中で、大学図書館など授業外学習の場の充実化が進められている。文部科学省学術情報委員会の審議まとめ「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について」では、大学図書館がラーニングコモンズを設置し、教育・学習支援の場として積極的に教育・学習に関与することが望まれるとされている（文部科学省2013）。具体的には学生の能動性を引き出すような、問題解決型学習に代表されるアクティブラーニングを導入した授業の推進であり、そのための基本的なリテラシーや知識・スキルの習得の支援、それらを活かす活動の場として、研究・教育リソースが集約されている大学図書館が学習支援を積極的に行うこととしている。代表的な例としては、ハード面としてラーニングコモンズが構築され（井上2009など）全国的に広がってきている。

ラーニングコモンズは主体的なグループ学習を支援する学習空間、学習スキルの習得

を支援する人的支援・ソフト面でのサービス、学習に必要なソフトや資料とそれらを統合した効果的な図書館マネジメントから構成される（米澤2008）。しかし、効果的に大学図書館で教育・学習支援を進めていくためには、図書館員に対して、教育・学習支援に関する知識やスキルを育成する必要がある（山田2010など）。

## 2. 図書館員の育成における課題

大学図書館員が教育・学習支援に関する知識・スキルを習得する必要性については指摘されてきた（井上2009）。しかし、従来の図書館員の育成課程において、教育・学習支援に関する研究知見を蓄積してきた教育工学・学習科学等科目は必修であることが数少なく（長澤2007など）、育成プログラムとして不十分と思われる。現在、国内外で Association of College and Research Libraries (ACRL)、国立情報学研究所、国立国会図書館や各地域の図書館協議会等を中心

に、大学図書館員向けのセミナーや e ラーニングを活用するなど教育の普及を行っている。しかし、学習支援、特に文部科学省学術情報委員会の審議まとめで記述されているような、アクティブラーニングに関する教育・学習支援については、図書館員が高等教育に関する動向や教育工学に関する知識を習得する以外にも、どのようにアクティブラーニングが進められているのか、アクティブラーニングの効果や問題点を把握することが求められるであろう。本実践では図書館員がアクティブラーニングを実体験することを通じて、アクティブラーニングについて考え、授業と連動したアクティブラーニングの支援について検討してもらうことを目的に、体験を通じて学ぶ手段として注目されているワークショップ（山内ほか 2013 など）を導入した研修を実施し、その効果を検証することを目的としている。本稿ではその 1 回目のワークショップの実施と成果について報告する。

### 3. 方法

#### 3.1. 受講者

受講者は 5 キャンパスからなる国立大学附属図書館員 13 名であった。各キャンパスにある図書館から参加した。図書館員としての平均経験年数は 10 年 5 ヶ月であり、経験年数の幅は 6 ヶ月から 26 年 6 ヶ月であった。職務は利用支援課、資料サービス係、参考調査係、企画運営係、情報基盤課、図書係、e リソースサポート係、企画係であり、貸出業務の他、情報リテラシーセミナー、学習支援サポーターの管理などであり、学生と接する機会の頻度は受講生間で差がある。

大学図書館の特徴として、教育・学習支援のための大学図書館の再構築に大学全体としては積極的な姿勢を示し、修士課程学生を学習サポーターとして雇用・配置するなど行っているが、図書館員全員が意識を統一している状況にはない。各キャンパスの図書館で図書館員の意識は異なっている。平成 26 年度から始まる全学教育の新カリキュラムに対応する学習支援をどのように企画し、実施すべきか、効果的な情報リテラシー育成をどの

ようにすべきか検討している段階にある。また将来的にキャンパス移転が行われるため、新図書館の学習支援機能についても検討する必要があることから、アクティブラーニングを中心とした教育・学習支援に関する知識やスキルの習得が求められている状況にある。

#### 3.2. ワークショップの内容

コースは全体で 3 回から構成される。第 1 回は「未来の図書館をつくろう」というテーマで、レゴブロックを使い、図書館員が考える未来の図書館を作り、プレゼンテーションするものである。第 2 回は講義形式で、平成 26 年度から始まる全学教育の新カリキュラムの構成や全学的な教育改革の動向について学ぶ内容であった。第 3 回は「図書館発の新企画を考える」というテーマであり、アクティブラーニングについて図書館がどう関わるか考える内容となっている。本稿では第 1 回について報告する(図 1)。第 1 回ワークショップの構成を表 1 で示す。



図 1 ワークショップの様子

#### 3.3. データ収集方法

第 1 回のワークショップでは事前事後の質問紙でデータの収集を行った。収集した項目は図書館員としての経験（非常勤を含む）の他、大学図書館に教育・学習支援の場として期待されていることに関する不安や期待、アクティブラーニングに関する学習支援が期待されていることに対する不安や期待などを事前の質問紙で自由記述にて調査を行った。事後では第 1 回ワークショップを受けた感想、考えなどについて質問紙にて調査した。

表1 第1回ワークショップの構成

順番	項目	説明
1	アイスブレイク	1人あたり30秒間の自己紹介を行う。
2	ペアインタビュー	ランダムにペアに分かれ、ペアの中でお互い15分ずつ「図書館員で楽しかった、良かったと感じるエピソード、図書館内の学習者をみて良かったと感じた場面」についてインタビューをする。
3	インタビュー結果報告	インタビューで聞き取った内容を報告し、参加者全体で共有する。
4	利用者観察・休憩	ランダムに3～4名のグループに分かれ、ペアインタビューで話したエピソードや後で取り組む課題「にぎやかだけでも静かな新しい図書館を作る」を踏まえて、図書館内の学習者の様子を観察する。
5	作品制作	グループ毎に課題に沿った図書館をレゴブロックで作成する。なお、制作の進行方法については指示していない。
6	プレゼンテーション	出来上がった作品について8分ずつプレゼンテーション、質疑応答を行う。

## 4. 結果

### 4.1. 事前

回収した質問の自由記述データについて、2名の図書館員と1名の教員で分類を行った。事前に3名が別々に発言に対して分類し、名をつけ、後日、分類名が異なる発言について、どの分類にし、どのような分類名にすべきか議論を行った。

事前の質問紙への回答では、文部科学省の答申に沿って大学図書館が教育・学習支援を担うことについて、3名がその方向性への同調、もしくは、新しい役割への期待を明確に示していた。例えば

国の方針として大学図書館の「新しい」役割が示されたことで、各大学内で図書館が活動しやすくなったと思う。この機会を大いに利用すべき。

といった意見が示されていた。また、「海外の事例のように、資料を提供する機能だけでよいのなら、図書館を閉めてしまってもよいと考えています。」といった伝統的な図書館像への批判と解釈できる回答もあった。

一方で、不安を示し、何らかの課題を認識したりなどする回答者が5名いた。不安の中

身については、

能動的でない人材の多くを能動的な人材へと転換させることは難しいと考えている。

図書館職員としてどのように関わっていけば良いのかよく分からない。

といった漠然としたものやアクティブラーナー育成の限界を指摘する声があった。また、課題として、学習環境デザイン、職員の意識、大学全体とのかかわり、といったことが挙げられていた。たとえば

何が教育・学習支援につながるかをまずよく考えないと、利用者の求める図書館像からますます遠ざかってしまうと思う。

大学図書館の役割がより能動的なものになっているように感じます。場を整備するとともに職員の意識も切り替えなければならぬと思います。

といった学習環境デザインにおいて利用者である学生の目線になる重要性を示唆するもの

や、それに合わせて図書館員の意識変容に関する必要性も感じていることを示す意見があった。その他にも回答中に見られた観点としては、教育現場とのギャップ、学習支援の評価があった。

アクティブラーニングの導入に関連した学習支援を図書館が担うことについては、期待を感じ、必要性を認識しつつも、教育現場との連携、学習環境デザイン、職員の意識、といった課題が認識されていた。

資料、場所、人的支援を提供できる図書館は学習支援を担うのにふさわしいと考える。教育を担当している教員との連携が課題だと思う。

アクティブラーニングを自発的に学生が行う環境をつくれるのか。また自由に話し合う場とは何人位が話し合うスペースをつくるべきか。従来の閲覧スペースとの区別をつくることができるのか

導入はよいことだと思います。が、場所だけ作って「これで学生はここに来て学習してくれるだろう」と、工夫せずに期待だけするのは危険だとも思います。仕組みづくりが大切だと思います。

など、アクティブラーニングの流れを受け入れつつも、図書館でどこまで学習支援が可能なのか、不安を感じていることがわかった。

また2名が図書館におけるアクティブラーニング支援について否定的な態度を示していた。1名は人的な課題を理由に挙げ、1名は、以下のとおりアクティブラーニングを従来の図書館と相容れない活動として捉えていた。具体的には

アクティブラーニングスペースという、どうしても騒がしいイメージがある。静かな図書館が好きなのにとっては、嫌な場所になってしまうのではないかと思います。  
(続く)

資料の置き場にも困っているようなのに、書架を取り払ってそのようなものを作ることはていこう(抵抗)を感じる

ある程度の期間、専任の職員が担当するのならありだと思うのですが、3年、場合によってはそれ以下の期間で担当する人物がコロコロ替わっては、学生にとっても職員にとってもマイナスだと思います。

というものであった。後者については、アクティブラーニングの学習支援を条件付きで認めつつも、現状の職員組織では困難であるという認識であることが示唆される。

平成26年度から始まる全学教育の新カリキュラムに対応する学習支援については、学生の図書館利用が増えるのではないかという期待を持ちながらも、不安を示す回答者がいた。また平成25年度まで各学部の初年次向けのセミナー授業の1回分で行っていた図書館の利用ガイダンスが新カリキュラムからはなくなることに對して、図書館を学生に知ってもらう機会が減ることへの不安を示す回答者もいた。

図書館を訪れる学生と、そうでない学生の差はとても大きいように感じていて、どちらが良い悪いということもありませんが、基幹教育(新カリキュラム)の中で学生が図書館を知る機会、図書館が大学教育を知る機会となり、選択が広がると良いと思っています。ただ、正直に申し上げると、基幹教育について勉強不足であり、不透明な部分が多いです。

今年まで実施されていたコアセミナーのコマが無くなり、図書館利用について説明できる機会があるのか不安である。

また、期待、不安、課題のいずれも、連携というキーワードが含まれていた。不安要素として、新カリキュラムの不明確さが複数の回答に見られた。人的リソースを課題認識として示している回答も複数あった。「場」の提供

で十分だと思う。1年生に対して図書館ができるのはそのくらいでは。」という図書館の役割を限定的に捉えた回答もあった。

#### 4.2. 事後

研修の内容については、選択式の設問で、大変満足した2名、満足した6名、どちらともいえない4名、満足しなかった1名、全く満足しなかった0名であった。

ワークショップを受けた後の感想についての自由記述からは、受講生のほとんどが何らかの気づきや発見を得ていたことが分かった。気づきや発見の内容は、アクティブラーニング体験、意識の持ち方、学習者観察、現状の業務など様々であった。

ワークショップで用いられる様々なアクティビティを解説付きで体験することができ、有意義だった。また、職場で個人の内面に踏み込むような話をする機会が減っているため、ペアインタビューやグループワークで参加者同士の交流ができてよかった。

インタビューでの「利用者を見て嬉しかったこと」や、館内でのフィールドワークを通じて、あまり図書館内での学習者を意識していなかった自分に気づきました。どのような設備を使っているのか、どういった人数構成で図書館を利用しているのかなど、少し意識するだけで、勤務している文系合同図書室における工夫点が見えてくるのではないかと思います。また、レゴワークショップでは「カウンターの設置」や「色分け」など、各グループで共通項がいくつか見られ、無意識に図書館の前提としているものや、イメージがあるように思いました。

例えば、1人目の発言はワークショップを有意義なものと感じているが、組織内の人間関係からの点からワークショップの効果について触れられており、ワークショップの構成がそのまま活かされたことが示唆される。また、これまでの事前の質問紙では、利用者である学生目線からの発言も確認されたが、このワ

ークショップにより、学生の学習行動にまで目が行き、図書館員の普段の業務に対するリフレクションが促されたことを示している。

一方で、3名の回答者がワークショップの成果を見いだせていなかった。

アクティブラーニングに対して感じるものの自由記述からは、半数以上の受講生が図書館におけるアクティブラーニングについて思考を深めて行ったことが分かった。

結局、アクティブラーニングとは何なのか、と感じています。先生も仰っていましたが、見方によれば、学習する環境を求めて図書館に足を運んでいる時点で、アクティブと言えるのではないかと、言葉に縛られる前に、利用者にどのように過ごして欲しいと思っているのかを振り返りたいと思いました。

静と動の場所を分けるなど、現状の図書館の中でのアクティブラーニングの考え方をみんな共有していると感じました。図書館の中で動の空間を積極的に作る必要があるのかという形で作るのかは図書館側できちんと考える必要があるのだと M 先生の話聞いて思いました。

それほど大仰に考えなくとも、何らかの支援はできるのではないかと考えられるようにはなった。

1 人目の発言は、一見、ワークショップに対して否定的なことを発言しているように思われるが、内容を踏まえて、アクティブラーニングに対する考え方を整理し、省察するというワークショップの効果が示されている。2 人目の発言では、ワークショップを通じて、図書館員の考えを共有し、図書館全体としての意識と活動を統一していくという、個人よりも、全体的な視点で省察している。3 人目の意見はシンプルなものではあるが、アクティブラーニングに対する考え方が変わったことを示している。アクティブラーニングのイメージが当図書館員の中でもできるようになり、予想される業務負担に対する恐れが軽減され

たことを示している。

また、アクティブラーニングを実際に体験することの重要性、図書館員がアクティブになる必要性、学習者の多様性をふまえた学習環境デザインの重要性といったことについて意識の向上を示す回答があった。

アクティブラーニングに慣れていない（または懐疑的な）職員が多いので、アクティブラーニングに適した環境を提供していくには、実際にやってみることが大事だなと感じた。

今後の図書館の学習支援においてアクティブラーニングの重要性は十分に認識しています。が、自分自身は、アクティブラーニング（グループワーク）によって、何かプラスになることを得た、という体験がありません。そういった体験ができれば、よりよい学習支援のあり方を考えられるかもしれないと思ったのですが、期待していた変化はありませんでした。ひとえに私の失敗、力不足によるものです。

学修環境を構成する4要素（活動、空間、共同体、人工物）の中で、図書館では「人工物」が重要というお話が印象に残った。学生のアクティブラーニングを支援するために、図書館員側もよりアクティブになるべきだという考えが強まった。

この3名の図書館員の意見はこのワークショップで行ったアクティブラーニングを体験することを通じて感じた図書館員のアクティブラーニングに対する慣れについて語っている点で興味深い。このワークショップにより、アクティブラーニングでの活動に失敗があったこと、アクティブラーニングをする上にあたっての図書館員の問題点が指摘されているが、このことによりアクティブラーニングの理解、重要性が認識され、アクティブラーニング支援を実施する図書館員自身がアクティブになる必要性について省察している。しかし、一方で、意識の変化が無いと回答した受講生も3名いた。

## 5. 考察と今後の課題

図書館員はアクティブラーニングや新カリキュラムに対する教育・学習支援へ期待と不安を感じ、様々な課題を認識している。アクティブラーニングを体験する第1回目のワークショップはアクティブラーニングについて思考を巡らすきっかけとなったものの、成果を見いだせず、意識の変化も見られない図書館員もいた。その要因を今後の課題として検討していきたい。また2回目の講義、3回目のワークショップについても分析を進め、アクティブラーニング支援を進めるための図書館員育成に効果的な研修のデザインについて検討をしていきたい。

## 参考文献

- 井上真琴 (2009) 「学びのマネジメント」を支援する, IDE 現代の高等教育, 510: 11-15
- 文部科学省 (2013) 学修環境充実のための学術情報基盤の整備について (審議まとめ), [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiel\\_dfile/2013/08/21/1338889\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiel_dfile/2013/08/21/1338889_1.pdf) (2013年10月11日取得)
- 長澤多代 (2007) アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ, Library and Information Science, 57: 33-50
- 山田政寛 (2010) ラーニングコモンズにおける学習空間と学習支援を考える, LISN, 144: 20-23
- 山内祐平, 森玲奈, 安斎勇樹 (2013) ワークショップデザイン論 - 創ることで学ぶ, 慶應義塾大学出版会, 東京
- 米澤誠 (2008) ラーニングコモンズの本質: ICT時代における情報リテラシー/オープン教育を実現する基盤施設としての図書館, 名古屋大学附属図書館研究年報, 7: 35-45